

- (1) 教科書の脚注(①～⑨)を読む (2) 音読をする
- (3) ④の例にならって、文の右側に、波線の助詞・助動詞について文法的な説明(訳や活用語など)を記入する。
- (4) 「尊敬」の助動詞の場合は、誰から誰への敬意かを記入する。わからなければ、『体系古典文法』で調べる。(4) も同じ。
- (5) ①の例にならって、文の右側に、二重波線部の敬語について、敬語の種類、誰から誰への敬意かを記入する。
- (5) *の語の意味を辞書で調べ、傍線部の間(吹き出し部分)に答えながら、文の左側に現代語訳を記入する。

歴史物語 大鏡 貫之と躬恒 p 182～183

文法事項
など

延喜の御時に『古今』抄せ^①られし折、貫之は^②忠岑や躬恒などは、御書所に^③召され^④て

延喜(醍醐天皇)の御代に『古今和歌集』を撰定なされたときに、(紀)貫之は^⑤もちろん、(壬生)忠岑や(凡河内)躬恒など(まで)が、御書所に召されて

現代語訳

誰が？何に？
帝が、
ほととぎすの忍び音が聞こえる春の夜の風情に

① いみじく^{*}興じ おはします。

② 謙・繁樹↓帝
候ひけるほどに、四月二日なりしかば、まだ忍び音のころにて、お仕えした時に、(その日は、)四月二日だったので、(ほととぎすも)まだ忍び音の頃で、(帝は、そのころの風情に)たいそう興趣を催していらしやる。

③ 尊・繁樹↓帝
召し出でて、歌仕うまつら^④しめ^⑤給へ^⑥了り。終

貫之
貫之をお呼びになつて、和歌を詠み申し上げさせなされた。

句切れはどこ？
三句切れ

② あやしきぞなき

「あやしき」ほど、どうなのか？
すばらしいことはない

こと夏はいかが鳴き^⑦けむ^⑧ほととぎす／この宵ばかり
他の年の夏はどのように鳴いただろうか、ほととぎすは。今宵ほど(ほととぎすの鳴き声が)不思議なくらいにすばらしいことはない。

下二段活用

類推～さえ
謙・繁↓世継たち

それを^⑨だいに^⑩けやけき^⑪ことに思ひ^⑫給へ^⑬しに、同じ御時、^⑭御遊びありし夜、^⑮御前の御階のもとに躬恒を召して、
それ(貫之の歌)をさえ、^⑯すばらしい^⑰ことと思つておりましたのに、同じ御代に、^⑱管弦の遊び^⑲があつた夜に、御前の階段の下に(凡河内)躬恒をお召しになつて、

ここから、躬恒はどのような身分と考えられるか？
低い身分

帝はどのようなことを命令したのか？
月を弓張という理由を和歌に詠めということ。

自尊表現

「月を弓張といふ心は何の心ぞ。これが^②仕うまつれ。」と「^③仰せ言ありしかば、
「月を弓張というわけはどういうわけであるか。その理由を和歌に詠め。」とお言葉があつたので、

照る月を弓張と^㉔し、^{副助・強意}もいふことは山辺をさしていればなり^㉕けり
照る月を弓張というわけは、山の辺りをめざして矢を射るように
入るからですよ。

掛詞「いれ」の2通りの漢字は？
(例) ふる (時間が) 経る・(雨が) 降る
「入れ」と「射れ」

帝 誰が？
最高敬語
尊・繁樹↓帝・用 同上
と申したるを、^[5]いみじう感ぜ^㉖させ^㉗給ひて、
と申し上げたのを、(帝は)たいそう感心な^㉘さつて、大桂を^[6]下^{*}さり、(それを)肩に掛けると^㉙すぐに^㉚、
^{接助}とすぐに
肩にうち掛くる
ままたに、

誰に？
躬恒

誰が詠んだ？
躬恒

何の比喩？
帝からのお恵み

白雲のこのかたにしもおりあるは^[7]天つ風こそ吹きてき^㉛ぬ^㉜・終^㉝推定・已^㉞らし
白雲がこちらの方に下りてきたのは、天から吹く風が吹いてきたから
なのでしよう。(白絹で織られた大桂が私の肩に下りてきたのは、
宮中にいらつしやる帝からのお恵みによるものでございます)。

掛詞「かた」「おり」「きぬ」のそれぞれ2通りの漢字は？
「肩」と「方」
「織り」と「下り」
「来ぬ」と「着ぬ」

縁語
「白雲 「と」 天つ風 「
「着 「と」 織り 「

具体的にはどのような者？
躬恒のような身分の低い者。
「勅」の意味は？
帝のお言葉・「命令

いみじかりしものかな。
「^[8]さばかりの者に、近う召し寄せて^勅禄^㉟賜はす^㊱・^㊲当然・体^㊳き
(そのやりとりは)すばらしかったものだなあ。(また帝が)その程度の者(躬恒のような身分の低い者)に、
な^㊴つてご褒美をお与えになるべき(はずの)に、
近くにお召し寄せに

なぜ「そしり申す」者がいないのか？理由を二つ。
・帝が重々しくいらつしやるから。
・躬恒は和歌の道で世間から高く評価されているから。

ことなら^㊵ねど、^[9]そしり申す人のなきも、君の重くおはしまし、
ことではないが、(それを)非難し申し上げる人がないのも、帝が重々しくていらつしやり、

また躬恒が 和歌の道に許さ^㊶れ^㊷・用^㊸ 受・用
また一方で、躬恒が和歌の道で(大家であると)世間から認められているからだ^㊹とこそ思^㊺つてお^㊻り^㊼まし^㊽た。
過去・已^㊾ 過去・已^㊿ しか。

- (1)教科書の脚注(①〜⑮)を読む (2)音読をする。 未然形↓未でよい
- (3)④の例にならって、文の右側に、波線部の助詞・助動詞について文法的な説明(訳、活用語など)を記入する。
- 尊敬の助動詞の場合は、誰から誰への敬意かを記入する。わからなければ、『体系古典文法』で調べる。(4)も同じ。
- (4)①の例にならって、文の右側に、二重波線部の敬語について、敬語の種類、誰から誰への敬意かを記入する。
- (5)*の語の意味を辞書で調べ、傍線部の間(吹き出し部分)に答えながら、文の左側に現代語訳を記入する。

大鏡 最後の除目 p 192〜194

この殿たちとは誰と誰？
堀河殿(兼通)と東三条の大将

[1] この殿たちの兄弟の御仲、 年ごろの官位の劣りまさりのほどに、 御仲悪しくて過ぎ ^④させ ^①給ひし間に、
この殿たち(兼通と兼家)の兄弟の御仲は、長年の官位の優劣(の競い合い)の間に、御仲が悪くてお過こしになつたうちに、

堀河殿 御病重くならせ給ひて、 今は限りにて おはしまししほどに、
堀河殿(兼通)は、ご病氣が重くおなりになって、ご危篤でいらっしゃったときに、

本動詞

東の方に ^{*}前駆追ふ 音のすれ ^⑧ば、御前に ^②候ふ 人たち、 「誰ぞ。」 など言ふほどに、
(邸宅の)東の方で先払いの音がするので、殿(兼通)のおそば(病床)にお仕えする人たちが、「誰(だろう)か。」などと言ううちに、

謙・従者↓兼通

「東三条の大将殿

参ら

尊・従者↓兼家 同上

「

と人の申しければ、「2」殿 聞かせ給ひて、

殿

「東三条の大将殿(兼家)が(ここに)参上なさいます。」と(おそばの)人が申し上げたところ、殿(兼通)がお聞きになって、

殿とは誰か？
兼通

誰が？どうなった？
私(兼通)
危篤になった

誰が？
兼家

「こそは」の後に省略されて
いる語は？○で囲もつ。
あらむ ・ あらめ

年ごろ仲らひよからずして 過ぎつるに、今は [3] 限りになりたる と [4] 聞きて、とぶらひにおはするに [5] こそは とて、
長年仲がよくなって過ぎてきたが、(私が)危篤になったと(兼家が)聞いて、きつと見舞いにいらっしゃるのだろう、と思って、

存在・体

御前

なる 苦しきもの取りやり、

尊・若侍↓兼通

大

ひきつくるひなどして、

[6] 入れ

奉ら

意志・終

おそばにある見苦しい物を片づけ、お休みになつてゐる所(寢床)を整理したりなどして、(兼家を)(迎え)入れ申し上げよう

誰を入れる？
兼家

誰が？
兼家

尊・従者↓兼家

完・終

誰が、なぜ「」のように思ったのか？
兼通
兼家が自分を見舞いに来てくれず、
門を通り過ぎて、内裏に向かったから。

とて待ち給ふに、「早く過ぎて、内裏へ 参ら せ 給ひぬ。」と人の申すに、 [8] いとあさましく心憂くて、
とおそばにお待ちになると、「すでに(門前を)通過(素通り)して、内裏の方へ参上なさつた。」と(おそばの)人が申し上げると、
(兼通は)たいそう驚きあきれ不愉快で、

※波線などの番号を振り直してますー 現推・終
御前に候ふ人々も をこがましく 思ふ^④ らむ。 おはしたらば、^① 関白など譲ることなど 申さむと思ひ^⑤ つるに。
おそばにお仕えする者たちも（私を）間が抜けていると思っ^ているであらう。（もしも兼家が見舞いに）いらっしやったならば、関
白などを譲ることなどを申し上げようと思っ^たのに。

具体的には？
兼家が危篤の兄を見舞うことをせず、
内裏へ参るような薄情な男であること。

^② つかればこそ 年ごろ仲らひよから^③ で 打消接ぐないで 過ぎ つれ。 あさましく安からぬことなりとて、
このよう（に薄情な男）であるからこそ長年仲がよ^くなくて過^ぎてきたのだ。（門前を素通りして参内するとは）驚きあきれ、
腹立^たしいことだ、と思っ^て、

人とは誰か？
兼通
存・体
限りのさまにて臥し 給へ^⑥ る^⑦ 人^③ の、^⑤ 「かき起こせ。」と^① 尊・若侍↓兼通 のたまへ^② ば、 人々あやしと思ふほどに、
危篤状態で伏せ^つていらっしやる人（兼通）が、「抱き起こせ。」とおっしやるので、人々が変だと思^ううちに、

誰に何がつく？
兼通に
物^の怪^ががつく
尊・若侍↓兼通
「車に装束せよ。御前^{*}もよほせ。」と^② 仰せ^④ らるれば、^④ 物^のつか^⑤ せ^③ 給へ^⑥ る^⑦ か、
「車に支度をせよ。先払いの者どもを招集せよ。」とおっしやるので、（人々は兼通に）物の怪がお取りつきにな^つたのか、

謙・若侍↓兼通
現し心もなくて 仰せ らるる かと、 あやしく 見^④ 奉^⑤ る ほどに、 御冠召し寄せて、装束など せ させ 給ひ て、
正気もなく（うわ言を）おっしやるのかと、不思議に思っ^て拝見するうちに、（兼通は）冠を持^つて来させな^さつて、装束などをお
召しにな^つて、

謙・若侍↓帝 尊・若侍↓兼通 同上
内裏へ^⑤ 参ら^⑥ せ^⑦ 給ひ^⑧ て、 陣の内は^{*} 君達^④ にかかりて、滝口の陣の方より 御前へ参らせ給ひて、
内裏へ参上な^さつて、門の内側では^⑤ 子息^⑥ たち（の肩）に寄^りか^かつて、滝口の陣の方から帝の前へ参上（しようと）な^さつて、

何のため？
兼通が死んだ後の次の関白には、自分（兼家）が
就きたいということを奏上するため。

昆明池の障子のもとに さし出でさせ給へるに、 昼の御座に、^⑤ 東三条の大將、 御前に 候ひ給ふほどなりけり。
昆明池の障子のところに姿を現しな^さつたところ、 昼の御座に（帝がいらっしやり）、 東三条の大將殿（兼家）が、帝の御前に伺候
してい^らっしやるところであ^つた。

完・終
この大將殿は、堀河殿すでに失せさせ給ひ^④ め^⑤ と聞かせ給ひて、内に関白のこと 申さ^⑦ む^⑧ と思ひ^⑨ 給ひ^⑩ て、
この大將殿（兼家）は、堀河殿（兼通）がすでにお亡くなりにな^つたとお聞きにな^つて、帝に関白のことを（お願い）申し上げよ
うとお思^いにな^つて、

誰の？
兼通の家の門

^⑥ この殿の門を通りて、 参りて申し奉るほどに、堀河殿の目をつづらかにさし出で^⑨ 給へ^⑩ るに、
この殿（兼通）の門前を通^つて、参内して（帝に関白のことをお願い）申し上げるときに、堀河殿（兼通）が目をつ^つと見開
いて現れな^さつたので、

なぜ「あさまし」と思っのか？
兼通は死んだと聞いていたのに、
突然現れたから。

誰が？誰をうち見る？
兼家が、兼通を。

帝も大将も [1] いとあさましく思し召す。 [2] 大将は うち見るままに、 立ちて鬼の間の方に おはし [A] 完・終
帝も大将（兼家）もたいそう驚き意外にお思いになる。大将（兼家）は（兼通を）ちらっと見るや否や、立って（隣の）鬼の間の
方に行ってしまうれた。

補助動詞

関白殿 御前に つい居 給ひ て、御気色いと悪しくて、「最後の [除目] 行ひに 参りて 侍り [B] 完了・体
関白殿（兼通）は帝の御前にひざまずきなさって、「ご機嫌がひどく悪い様子で、「最後の [除目] 官吏を任命すること」を行いに参内
いたしました。」と（申し上げて）、

蔵人頭 [3] 尊・若侍↓兼通 召して、関白には頼忠の大臣、東三条殿の大将を取りて、小一条の済時の中納言を大将に
蔵人頭をお呼びになり、関白には頼忠の大臣（を任命され）、東三条殿（兼家）の大将（の官職）を取り上げて、（代わりに）小一
条の済時の中納言を大将に

なし 聞こゆる 宣旨下して、東三条殿をば治部卿になし 謙・若侍↓兼家 尊・若侍↓兼通 尊・若侍↓兼通
任命申し上げる宣旨を下して、東三条殿（兼家）を治部卿になし申し上げて（内裏を）退出なさって、

誰が？
兼通

殿とは誰？
兼通

ほどなく [3] 失せ 給ひ [4] 過去・体 心意地にておはせし殿にて、 さばかり 限りに おはせ し に、
まもなくお亡くなりになったのですよ。（兼通は）意地っ張りでいらっしゃったお方で、あれほど危篤状態でいらっしゃったのに、

誰への？
兼家

[5] ねたさに 内裏に 謙・若侍↓帝 尊・若侍↓兼通 同上 可能「べし」の用「べく」のウ音便 強意
（兼家への）憎しみのために内裏に参内して（除目のことを）奏上なさったことは、他の人にはとても（真似）できなかったこ
とですよ。

補助動詞

「されば」とはどういうことか？
兼家が、危篤の兼通を見舞うことなく、
次の関白に就きたいと奏上するために
参内するという薄情な行動をとったこと。
[6] されば、 東三条殿 官 取り [8] 尊・若侍↓兼通 給ふ ことも、 ひたぶるに 堀河殿の 非常の御心にも [9] 丁・若侍↓大宅世継たち 侍ら ず。
そういうわけで、東三条殿（兼家）の官位を取り上げなされることも、一概に堀河殿（兼通）の異常なお心（によるもの）だと
いうわけでもございません。

このゆゑは、 かく 断定・終
断なり。
この事情は、「こういつ」とである。

- (1) 教科書の脚注(①～⑫)を読む (2) 音読をする
- (3) ④の例にならって、文の右側に、波線の助詞・助動詞について文法的な説明(訳、活用語など)を記入する。
- 尊敬の助動詞の場合は、誰から誰への敬意かを記入する。わからなければ、『体系古典文法』で調べる。(4) も同じ。
- (4) *の語の意味を辞書で調べ、傍線部の間(吹き出し部分)に答えながら、文の左側に現代語訳を記入する。

日記文学 蜻蛉日記 うつろひたる菊 p 136～138

正月ばかりに、^①二、三日見えぬほどに、^②ものへ渡ら^③むとて、^④「人」来^⑤ば、とらせよ。」とて、書きおきたる、正月ごろに、(夫が)二、三日姿を見せない時に、よそへ出かけようと思つて、「(私の留守中に)あの人が来たら渡しなさい。」と言つて、書いておいた(歌)、

誰が？
兼家

誰が？
私(作者)

「人」とは誰のこと？
兼家

何を？
私の心

「野にも山にも」はどこにかかるか？
なきてこそゆけ

「4」
受・未 打消・已
知ら^⑥れ^⑦ね^⑧ば 身をうぐひすのふり出で つつ なきてこそゆけ
「私の」心を知ってもらえないので、わが身をつらく思い、鶯が声をふりしぼりながら鳴くように、私は家を出ながら泣いて行きます。野へでも山へでも。

うぐひすの^{*}あだに^⑨ 出行か^⑩む 山辺にも なく声聞かば たづぬばかりぞ
鶯が氣まぐれに出て行く山辺にも、その鳴く声を聞いたならば、訪ねて行くだけだよ。
(あなたがどこへ行こうとも、あなたの泣き声を聞いたら訪ねて行くよ。)

掛詞「うぐひす」「ふり出づ」「なき」のそれぞれ
2通りの意味は？
「うぐひす」と「憂く」
「声をふり出づ」と「家を出づ」
「うぐひすが鳴き」と「私が泣き」

など言ふころより なほもあらぬ ことありて、春夏なやみくらし 八月つごもりに
などと言っている頃から、普通ではないこと(懐妊)があつて、春と夏は体調を崩して日々を過ごして八月の下旬に

とかうものし^⑪つ。 「6」
そのほどの 心ばへは^⑫し^⑬も、ねむごろなるやうなり^⑭けり。
どうかこうにか出産した。そのころの(夫の)心遣いは、愛情深いようであつたよ。

誰の？
兼家

誰がどこから？
兼家が私の家から

誰が？
私(作者)

さて九月ばかりになりて、^⑮出で^⑯に^⑰ たる ほどに、箱のあるを^⑱手まさぐりに開けて見れば、
そうして、九月頃になつて、(夫が私の家から)出て行つたときに、文箱が置いてあるのを手慰みに開けて見ると、

どういふことに對して「あさまし」と思つたのか？
他の女に對して送らうとした兼家の手紙があつたこと。

人のもとにやらむ^⑲ 意志・終
としける文あり。^⑳「9」
あさましさに、見てけり^㉑とだに知ら^㉒れ^㉓む^㉔と思ひて、書きつく。
人(他の女)のもとに送らうとした手紙がある。驚きあきれることなので、せめて、見てしまったよ、とだけでも知られたと思つて書きつける。

疑はし／ほかに渡せ^㉕る 完・体
疑わしいことです。他の方に送つたお手紙を見ると、
ここ(へ来るの)は途絶えようとしているのでしうか。
疑問
とだえになら^㉖む^㉗とす^㉘ 推量・終
現推

句切れはどこ？
初句切れ

「渡すせ	「」	「踏み
「途絶え	「」	「江
は「橋	「の縁語	

掛詞「疑はし」「ふみ」「とだえ」のそれぞれ
2通りの意味は？
「疑はし」と「橋」
「文」と「踏み」
「途絶え」と「江」

など思ふほどに、むべなう、十月つごもりがたに
などと思ううちに、案の定、十月の末ごろに、三夜つづけて姿を見せないときがある。(夫は) そしらぬふりをして、「しばらく(あなたの気持ちを) 試しているうちに(日が過ぎたのだ)」

誰の姿が？
兼家

これとは「の」に「た」
私の家

誰が？
兼家

など、
[1] 三夜しきりて見えぬときあり。つれなうて、「しばし試みるほどに」
[2] けしきあり。これより、夕さりつかた、「内裏の」方ふたがりけり。」とて
[3] 出づるに、心得で、人をつけて
などと思わせぶりなことを言う。ここ(私の家) から、夕方、「ここでは) 宮中の方角が方塞がりだったよ。」と言って出て行くので、納得できないで、人をつけて (作者の家から宮中の方角は、陰陽道で凶の方角に当たってしまうということ)

係助詞「なむ」の結びの語は？
ぬる

何をとめた？
兼家の牛車

見すれば、「町の小路なるそこそこに」なむ、[4] とまり 給ひ ぬる。」とて、来たり。さればよ といみじう心憂しと思へども、(どこに行くか) 見させると、「町小路にあるどこそこで(牛車を) お止めになった。」と言って、帰ってきた。思った通りだよ、とてもつらいと思うけれど、

「さ」の具体的な内容は？
夫(兼家) が来た

言はむ やうも知ら で あるほどに、二、三日ばかりありて、暁がたに門をたたくときあり。[5] さ な めり
(文句の) 言いようもわからなくているうちに、二、三日ほどして、夜明け前頃に門をたたくときがある。その(夫が来た) ようだと思ふけれど、

と思ふに、憂くて、開けさせ ね ば、例の家とおぼしき所にものしたり。つとめて、なほもあら じ、と思ひて、つらくて開けさせないでいると、(夫は) 例の(女の) 家と思われるところに行ってしまった。
翌朝、このまま放ってはおくまいと思つて、

掛詞「あくる」の2通りの漢字は？
(例) ふる (時間が) 経る・(雨が) 降る
「夜が明くる」と「戸を開くる」

嘆きつつ 一人寝る夜をあくるまは いかにかしき ものと かは 知る
嘆きつづけて一人で寝る夜が明けるまでの間は、どんなに長いものか(あなたは) わかりますか、いや、(門が開くのも待てないあなたには) わからないでしょうね。

と、例よりはひきつくろひて書いて、* うつろひ たる菊にさしたり。かへりごと、
と、いつもよりは改まって書いて、色のあせた菊に(その歌を) 挿した。返事は、

兼家は何が「ことわり」であると言っているのか？
私(作者) が、夜離れがちな兼家に対して、非難すること。

「あくるまでも試み む とし つれ ども、* とみなる 召使の来あひたりつればなむ。いと
「夜が明けるまでも、(いや) 戸を開けるまでも待つていようとしたけれども、急ぎの召使が来合わせたので(帰ってしまった)。
(あなたの言うことは) 本当にもっともなことだったよ。

げにやげに冬の夜 ならぬ 真木の戸もおそくあくるは わびしかり けり」
なるほどなるほど、(冬の夜はなかなか明けられないものだけれどその) 冬の夜ではない真木の戸もなかなか開けないというのは、(今は冬の夜だけになおのこと) ことわりなり つるは、

誰が？
兼家

さてもいとあやしかりつるほどに [7] * 事なしびたり。しばしは忍びたるさまに、
それにしてもとても不審に思えたほどに、(その後の夫は) 何気ないふう振る舞っていた。しばらくは人目を忍んでいる様子で、

なぜ「心づきなく」思うか？
「宮中へ」と言う言い訳をせず、他の女のもとへ行くから。

「内裏に。」など言ひ づつ ぞある づき を、* ことわりなり づるは、
「宮中に(行く)。」などと(言い訳を) 言いつづけているべきなのに、いっそ不愉快に思うことが、限らないことよ。